様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 8 日現在

機関番号：１３７０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009 年度～2011 年度
課題番号：21520534
研究課題名（和文）　演劇的アプローチを使った音声教育教材の開発
研究課題名（英文）　Development of teaching materials of Japanese speech communication based on theatrical approach
研究代表者
橋本　慎吾(HASHIMOTO Shingo)
岐阜大学・留学生センター・准教授
研究者番号：20293582

研究成果の概要（和文）：
本研究は日本語音声教育の新しい方法論として、演劇の知見を援用した「演劇的アプローチ」による日本語音声教育の開発を目的とし、劇団・青年団の新作公演稽古に見られる音声的変化分析し、その結果を踏まえ、日本語教科書の会話文を使った自然な日本語会話を目指した音声教育を試行し、その成果を日本語母語話者（大学生）の前で披露し、評価を受けた。その結果、評価の高かった学習者においては間のとり方、流暢さ、文の区切り方、声の大きさなどを評価するコメントが多く、それらが言語情報（発音やイントネーション）の不備をカバーしたという評価がなされた。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this research is the development of the Japanese speech education based on "theatrical approach" for teaching Japanese para-linguistic features. Firstly, phonetic change including prosody, pause in the step of rehearsal was analyzed. And secondly, based on this analysis, education of Japanese conversation using conversation sentences on Japanese textbook was designed, and foreign students learning Japanese practiced Japanese conversation for "natural" Japanese conversation. Students' conversation was evaluated by Japanese native speakers (university student) . As a result, the learner highly regarded had a lot of comments about the para-linguistic features(timing, fluency, volume control, etc.), and the comment which their incompleteness of linguistic information (pronunciation, word accentand intonation) was accomplished by these para-linguistic features.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	200,000	60,000	260,000
2011 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総　計	1100,000	330,000	1430,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：音声教授法、演劇的アプローチ、舞台稽古

１．研究開始当初の背景

(1)パラ言語教育の重要性

日本語音声の中でコミュニケーション上重要な要素として、パラ言語情報に対する研究が進んでいる。パラ言語情報とは、単音やアクセントなどの言語情報に付与され、話者態度や感情などを司る情報である。コミュニケーションにおいて、発音や文法の正確さは確かに重要であるが、それ以上に、話し手である日本語学習者自身の意図や感情を正確に実現することも重要である。この重要性を示す事象として、「印象誤解」を挙げたい。印象誤解とは、話者の意図や感情と音声情報との間のズレにより生じる誤解のことで、例えば中国語話者が交わす普段の中国語会話が日本語話者には喧嘩しているように聞こえるといった誤解がよく知られている。外国語に対する誤解のみならず、母語話者間でもこのような誤解が生じることがある。例えば「怒っていないのに怒っているように聞こえる」といった誤解である。この印象誤解を生む原因は、パラ言語情報の実現の不備にある。つまり、日本語学習者が日本語パラ言語情報を正確に習得することにより、学習者は日本語話者との円滑なコミュニケーションを図ることができる。

(2)パラ言語教育の現状

パラ言語情報の重要性については近年関連学会でも数多く指摘されているところであるが、その教育に関しては、単音やアクセントなどの言語情報教育に比べ、整備されていない。その理由として、従来の音声教育をパラ言語にもそのまま使用していることが挙げられる。従来の教育方法は、ミニマル・ペアの提示などにより、主に単語や文を繰り返し発音するといったコンテクスト・フリーで行なわれてきた。言語情報は型を有するのでコンテクスト・フリーでも十分教育が可能である。しかしパラ言語情報は個人間のばらつきもあり、また同じ「怒り」でも程度や場面、相手との関係などによりバラエティーがあり、アクセントなどのような「型」を示すことは難しい。もちろん典型的な「怒り」のイントネーション・パターンというものは存在するが、その典型的パターンを従来の方法で練習しても、実際の会話の中でそのまま使えるわけではないことは自明である。つまり、パラ言語情報教育には、従来とは異なる方法論、教授法が必要なのである。

２．研究の目的

(1)演劇的アプローチ

以上の背景を踏まえ、本研究者はは、戯曲などのテキストを舞台上で的確に表現し、また必要であればそれを何度でも正確に繰り返すことのできる「演劇」という分野に注目し、教育方法の研究を進めている。演劇を語学に、というアイデアは一見突飛なものに感じられるかもしれない。それは「演劇」という言葉に大仰なものを感じているため、そのように感じられるのだと推察される。しかし、語学教育の現場に目を移すと、ほとんど全ての教室活動は、教師、あるいは他の学習者の目の前で発表することで構成されているわけで、この点からも演者と観客の関係を常に有する演劇と、発表者と観察者（教師・学習者）の関係を有する語学教育との共通点を見いだすことができる。つまり、演劇と語学は、全くつながりのない活動ではなく、むしろ積極的に活用しあうことで大きな結果を生み出しうる分野であると言えるのである。特に、繰り返しになるが、リアルな感情を込めた台詞を、何度でも同じように繰り返すことのできる俳優が日々行なっている稽古や練習の中に、外国語を学ぶ際に応用できる数多くのアイデアを見いだせるに違いないと考え、本研究者はこれまで様々な実践を行なってきた。これを「演劇的アプローチによる日本語音声教育」と呼んでいる。

(2)本研究の目的

本研究は、演劇の俳優や演出家が稽古の中で実践している練習法や指導法などを調査・分析し、演劇的手法を用いた日本語音声教育のための教材開発を行なうものである。

演劇の稽古において、演出家がどのような指示を出し、その指示に対し俳優がどのように自身の音声表現を変化させるかを分析することにより、日本語音声教育に応用可能なファクターを抽出する。そこから、実際の音声指導における具体的な方法論や教材をデザインし、実践する中でその教育効果を図る。研究期間内に、教材の一試案を提示したいと考えている。

本研究は、「音声教育に特化した演劇的アプローチ」を目指している。これは日本語音声教育における新しい方法論として大いに可能性のあるものであり、本研究が進むことにより、日本語学習者に対する日本語コミュニケーション教育がより充実したものとなると考えられる。

３．研究の方法

本研究では、(1)演劇の稽古過程における音声面の変化の分析、(2)その結果を踏まえた日本語音声教育の教授法・教材の開発、の２つを行なった。

(1) 演劇の稽古過程における音声面の変化の分析

本研究が分析資料とするのは、平田オリザ氏が主催する劇団・青年団の舞台稽古である。

青年団の舞台は「静かな演劇」と呼ばれる新世代の演劇として注目を集めており、特にそのリアルで自然な台詞は、俳優が台本なしでアドリブで演じていると観客に錯覚させるほどである。この自然な台詞が生み出される過程を分析し、自然な日本語音声の習得にむけた音声教育への応用を目指す。また、青年団は、その稽古でも従来の演劇とは異なる特徴を持っている。平田氏の稽古には、(a)戯曲を細かいシーンに分け、シーンごとに数回～数十回繰り返して練習する、(b)実際に演じながら、台詞に手を加えていく という 2 つの大きな特徴があり、これは一般的な演劇の稽古とは異なる手法であると言われている。本研究では特に、シーンごとに練習する点に注目し、演出家が何をどのように修正しようとしているのかを、演出家の指示から検証し、更にその指示により、俳優の演技にどのような相違が見られるかを分析する。
演劇の舞台稽古における演出家の指示と俳優の台詞変化との関係を分析し、そこから「台本の素読み」から「自然な日本語」に到達する過程における俳優の台詞の音声的変化を捉える。

(2) 日本語音声教育の教授法・教材の開発
　従来の音声教育は単音やアクセントなどの言語情報中心である。一方、演劇の稽古において、言語情報は既に俳優が身に付けているものであり（母語話者・東京方言話者であれば)、渡された台本を読み合わせる段階で多少の調整はあるがそれが稽古の中心ではない。稽古はその次の段階に対して行なわれる。次の段階とは、言葉のやり取りにおける抑揚やタイミング、相手との距離、立ち位置、身体の動きなどを含めた総合的な表現を、演出家の下で繰り返し調整することである。この稽古によって、自然な会話に近づいていく。再び音声教育に戻ると、自然な音声会話の実現を目指す教育においては、言語情報中心の教育では十分ではなく、演劇稽古のような「次の段階」の教育が必要となる。
本件旧では、演劇の稽古過程の音声分析を行い、その結果を踏まえながら日本語音声教育の教授法・教材を開発する。開発教材については実際の教育現場で試用し、学習者の学習過程における音声的変化を録音・評価し、教材の妥当性を検討する。

４．研究成果
(1) 演劇の稽古過程における音声面の変化の分析
劇団青年団の新作稽古において、平田氏の指示が多く入ったシーンを抽出し、稽古段階間で比較・分析を進めた。その結果、俳優の台詞の F_0 は、個々の台詞ではなく、シーンの流れの中で、話者同士のやり取りの中で調整されていくことが分かった。この結果により、従来のコンテクスト・フリーの文単位における音声特徴とは異なる特徴を提供することができた。

(2) 日本語音声教育の教授法・教材の開発
まず会話文を読みながら言語情報の指導を行なった後、会話文を一つのシーンと考え、実際に相手との距離や身体の動きなどを意識しながら、抑揚やタイミングを調整していく。こうした練習を重ね、日本語母語話者（大学生）の前で披露し、評価を受けた。その結果、評価の高かった学習者においては間のとり方、流暢さ、文の区切り方、声の大きさなどを評価するコメントが多く、それらが言語情報（発音やイントネーション）の不備をカバーしたという評価がなされた。
　以上の結果により、会話文を一つのシーンと捉えての抑揚・タイミング調整によって、学習者の音声に対し一定の評価を受けることができた。しかし、この研究を進める中で、音声教育の基となる会話文の選定に問題があることが分かってきた。
今回の研究において使用した会話文は、教科書に掲載されている会話文をそのまま使用している。しかし教科書の会話文はもともと「自然な」会話を想定して作られたものではない。今回使用した『みんなの日本語　中級Ｉ』の会話文は、付属ＣＤの音声を含め、音声研究者の監修が入ったものではあるが、「自然な」日本語会話としては十分とは言えず、この会話文による音声教育は、この会話を音声として実現することにおいては意味があるが、日本語の音声会話を実現するということにおいては不十分と言わざるを得ない。
この音声教育を進めるためには適切な会話文が必要である。一つの可能性として、本研究が基盤としている演劇を援用すること、例えば劇作家によって書かれた日本語教育のための会話文を使用することが考えられる。劇作家は音声再現することを想定して戯曲・台本を作る。その技術を応用し、音声再現することを想定した日本語会話文を作成するのである。この考えに基づき、劇作家の平田オリザ氏によって書かれた会話文が 2012 年に完成した（野呂博子・平田オリザ・川口義一・橋本慎吾(2012)『ドラマチック日本語コミュニケーション　「演劇で学ぶ日本語」リソースブック』、ココ出版　第７章に収録)。今後は、この会話文を使用して教育方法の開発を進めることができるのではないかと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
橋本慎吾(2011)「「読み合わせ」を意識した音声教育デザイン」、『岐阜大学留学生センター紀要』、査読有、2010、55-62 ページ

〔学会発表〕（計３件）
① 橋本慎吾（2010）「「読み合わせ」を意識した活動による会話授業デザイン」、第 3 回国際表現言語学会大会（2010 年 8 月 6 日・摂南大）
②野呂博子、川口義一、平田オリザ、橋本慎吾(2010)「日本語コミュニケーション教育への新しい切り口：演劇的アプローチ」2010 世界日本語教育大会（2010 年 7 月 31 日・国立政治大学（台湾））
③ 橋本慎吾(2009)「演劇の稽古における韻律変化の分析 ～劇団青年団の新作稽古の台本読みあわせからゲネプロまで～」、日本音声学会 2009 年度全国大会(2009 年 9 月 27 日・九州大)

〔図書〕（計１件）
野呂博子・平田オリザ・川口義一・橋本慎吾(2012)『ドラマチック日本語コミュニケーション 「演劇で学ぶ日本語」リソースブック』、ココ出版
（第１章、橋本慎吾「演劇を活用した日本語音声教育」38-58 ページ）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
橋本 慎吾（HASHIMOTO Shingo）
岐阜大学・留学生センター・准教授
研究者番号：20293582

(2)研究分担者
（ ）

研究者番号：

(3)連携研究者
（ ）

研究者番号：